

四谷の

千枚田だより



号 外

いなかだったわけですが、今や愛知県の顔、国の顔としてその存在感は大

新年祝賀会

一月三日、恒例の連谷公民館主催の新年祝賀会が開催された。

まず、原田公民館長から来賓の紹介と、この地域には二つの核がある。その一つは「四谷の千枚田」であり、もう一つは連谷小学校である。その一つ、連谷小学校は二十七年で閉校になり区民共通の核が一つなくなる。生まれ親しんできた学校と連携した行事には大勢が参加していただき、その後の連谷地域づくりに繋げていきたいと願う。

穂積市長様

前略、さて、新たな年を迎え、地方創生という言葉が行きかっています。十年前を思い起こしますと、鳳来町最後のイベントとして全国棚田サミットが愛知万博と同時に開催されました。連谷の、かつては打ち捨てられようとしていた棚田も全国棚田サミット開催を機に四谷の千枚田を守ろうという機運が高まり地域ぐるみで四谷の千枚田を広め、世の中に知らしめることができました。それ以降のサミットの有り方も全国に知らしめる大きなきっかけとなったことは未だに記憶に刻まれております。この、四谷の千枚田も一部の人しか知られて

きなものであります。千枚田の存在、棚田の存在を広く社会に知らしめたその力を、その価値を守る地域の力は例え様のない大きなものです。そんな中で小学校が閉校となり、この地域をどのような形で守り、発展させていくのか、我々先人から引き継いできたものを次の世代に繋げて行くのか、お互いに知恵を出し合わなければならぬ局面に立たされています。地方創生とは、それぞれの地域の力が問われる時代になってきます。消滅可能性都市とか言われていますが、行政の体制もそれぞれの時代の中で合併したり連携したりして、なんとか行政運営が機能していくわけですが、その中でも一番大切なものはやはり人々の暮らしと地域の活力だと思えます。自治体の経営だけでなく、地域の経営力をより多く取り入れながら地域資源を活用、盛りたててゆくため観光交流の面でも農業振興においても皆さま方で盛りたてていただき、市としても何ができるか皆さま方の忌憚のない意見を頂戴したいと思います。

今年には棚田サミット十周年、新城市制十周年の節目であります。これから新東名の開通など大きなチャンス控えております。我々の地域

の資源を活かし、若い人達が住み暮らしやすい地域づくりを市民の力を信じながら、皆さまのお力をお借りしながら守り、育てて行きたいと思っております。 後略

峰野県議会議員様

前略。昨年、自然災害で二つの教訓的な出来事がありました。一つは豊根の雪害であります。ほとんどの家で五日間停電し、人的被害が重なって、なんとかやりくりをして暮らしておりました。この土地に住んでいる人が生活の知恵で五日間をしのいだ訳です。もう一つは長野県で地震があり、大きな被害があった訳ですが、一つの地域で家屋の下敷きになった人を助け出し、そして死者を出さなかった訳です。先ほど、公民館長さんとお話されたように、ふだんから地域の人達の交流が大事な事と思えます。何かあった時にはそれが生きるのではないかと改めて思いました。

地域創生と云う言葉が飛び交っております。初めに一億円配った「ふるさと再生」二回目に「地方再生」今度「地方創生」という言葉となっております。これは、戦後七十年になって今の日本の社会構造をそのままにしておく、「やばい」ぞと・多くの人達が思うようになってきた訳です。私たちの地域を見ても四校統合が進んでおります。この、現実をみて、やはり私達の地域をどのようにして守り、支えていくのか、地域間の構想を描き、若い人達が住んで頂けるかを皆で知恵を絞ると

いうことではないでしょうか。 後略

柴田市議会議員様

昨年、議会において五回、質問を行い、そのうち三回はこの地域の質問をさせていただきました。これからも、皆さまのご意見(声)を頂きお聞きし頑張る所存です。

・・・それでは乾杯。

今枝衆議院議員様

遅れて申し訳ありませんでした。今枝、お前はいいから妻をよこせと言われましたが、本人で本当に申し訳ありませんでした。四谷の千枚田は、棚田は日本の宝であります、日本を支える大きな資源がいっぱいあります。この、資源を皆さまと共に、日本中に世界に広げていきたいと思っております。



タカさん、リンさんの新年初歩き珍道中記

連谷小学校、朝五時半出発。参加者が例年の半分以下という寂しいなか、三人での初歩きと相成った。



何も正月の二日から無謀な事をしなくてもいいと思いつきながら、何故か歩き出した。元日の御酒と夜更かしで体調は最悪。・・・と、滝上を目の前にしてダイさんが体調不良（風邪と足痛）でリタイヤ。無理はいかん。来てくれただけでも嬉しい、帰って一杯飲んで寝りんと論ず。

海老の町も静かなもんで車も通りやせん。大手を振って道の真ん中をど歩き。玖老勢のサークルKで朝食のパン二つ買う。そろそろ車の往来も人間も出てきました。他人から見れば「何を、正月からバカな事やつとるだん」と、見る目が冷やかである。

次の目標は新城東高校前のコンビニ。なぜ、コンビニか？という「食べ物」がある事、座り込んでいても違和感がないし、「変なおじさん」で許してもらえそうだから。タカさんは歩くのが速い速い。さすが毎日一万二千歩を目標に歩いて

ている人だ。（足が決して長い訳ではないが、回転が速い）

目標のコンビニまでタカさんに十五分遅れで到着。九時半頃だったかな？

さすがにここまで来ると足の付け根も痛みだし、この先の本宮山への登り坂が気になる。（箱根を走っている人もいるというのにまだ二十km来てないかな？）コンビニで「ビールでも」と思ったが、先の事を考えて止めた。俺が酒を飲まないなんていつ以来か？。完歩した後の「生ビール」だけを頭に描いて、休憩もそこそこに「よいしょ」の掛け声とともに出発。タカさんはあつと

いう間にはるか彼方。ラジオで箱根駅伝を聞きながら我負けじと歩くが足が痛い。待ち合わせのセブンイレブンで昼食用のおにぎりを買い、作手街道を本宮山山頂を目指して坂道をひたすら歩く。新東名の下をくぐり、雁峰林道の入り口を過ぎ、「十二支」の絵が「申」のあたりまで来ると県道横に雪が積もり出し、益々足が痛くなり、深い深い後悔の念で「来年は絶対に本宮山は止めるぞ」とブツブツ、前を見てもタカさんの姿はないし、携帯も圏外、引き返そうにも恥ずかしいし、暑くなつて服を脱ぎながら後ろから来る車の邪魔にならない様に雪道をテクテク。やつとこさで本宮山スカイライン入口に到着したのが十三時頃？。二十分も寒空で待つとつてく

れたタカさんをみて涙がポロポロとまらない状態。

昼飯を食べようにも胃が重く、喰い気なし、「お〜い、お茶」を飲むのが精一杯。休憩もそこそこにタカさんより先に出発。足の裏にマメができた様な感じで、お風呂に入った時の痛みがどんなものかが楽しみだ。（タカさんも足の小指にマメができたみたいだ）

本宮山スカイラインに来る車の多いにはビックリ。よくよく考えてみると砥鹿神社奥の院に初詣の人達だ。県道脇の距離表示の数字が減って行くのを手掛かりに「後、三キロ」「あと、一キロ」。ここまで来ると道全面が雪だ。チェーンをまいている車に出会ったり、車を止めて雪遊びしてる親子にであつたり、そんな横を何が好んで歩いてるのか。・・・と、十四時半頃、ついに本宮山砥鹿神社奥の院に到着。身体中ガタガタ、本当によくここまで来れたもんだ。腰を下ろしたら立ち上がる事も出来ず、我ながら情けないし、都市を感じた。

生まれて始めて奥の院まで来た。一応、参拝して、証拠にタカさんに写真を撮ってもらった。（皆、信じてくれないので）・・・さて、目的は達成。だが、下山する事は頭に一切なく、簡単に下りれると思つていたのが大間違いのストロドッコイ。雪の積もっている登山道に一苦労。足がわらうし、力は入らないし、

登るのもきつい下りるのも厳しい。階段を一步一步、また、一步と、ゆっくりユツクリ。滑らない様に。こんな時間でも登つて来る人がおるには驚き。タカさんは登山道の下鳥居から奥の院の鳥居まで五十分を切つて登つたそうで、それも驚き。下山の途中、雪が横なぐりに降つてきて、遠くを見ても真っ白で「どうやって家に帰ろうか？」「遭難したらお助け隊の連中、なにを言うか分からないし、恥ずかしい」などと思いつき、景色なんか見るヒマもなくひたすら下山。携帯がつかなくなったので待つとつてくれるタカさんに、先に温泉に入つとつておくれんと連絡して（いつも待たせてゴメンなさい）。十五時半、やつとこさ「本宮の湯」に。「温泉に」「温泉に」と思つとつたら「満員で三十分待ち」・・・「そんなバカな」トホホホ。（大）を、二人で寂しく反省会をして何とか家に帰つて来た。所要時間十時間、歩いた距離四十三km。来年からは無謀な事は止めて、地道に近場の「東栄温泉」に行くこととします。

一緒に歩いたタカさんとは、高橋賀津男君です。泣く泣くリタイヤしたダイさんは、大橋剛君です。 林 義明 記

行 平成二十七年一月三日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責 小山舜二